市民特派員
レポート

光海軍工廠のあったまち

軍都から生まれ変わった近代都市　光

島田川東岸に広がる工場群。瀬戸内海工業地帯・周南工業地帯の一翼を担う光市、社会の教科書には、工業都市として光市が紹介されてきました。

しかし、戦前は、漁業と農業を主な産業とする、いくつかの村が集まった、日本全国どこにでもあるようなまちでした。そんな田舎の村を、ある日突然歴史の偶然が襲いました。３万人以上の人が働く大軍需工場が建設されるというのです。田舎のまちが、突然、巨大な軍都へ生まれ変わりました。

「光海軍工廠（しょう）」。まちの将来を一変させたこの巨大軍事施設を抜きにして光市の歴史は語れません。当時のことを知る人たちが少なくなっていく中で、もう一度歴史を検証してみました。

市民特派員　吉村（よしむら）　芳江（よしえ）さん

突然の光海軍工廠建設計画

光地方史研究会の佐伯亮二さんにお話をお聞きしました。

吉村　光海軍工廠ができる前の光市は、どのようなところだったのでしょうか。

佐伯　光海軍工廠が完成したのは昭和15年10月です。当時は、室積町と、周南町（浅江村、島田村、光井村、三井村の4村が合併）とがあり、海軍工廠が正式に光と命名されたことから周南町が光町になり、昭和18年4月1日に室積町と合併して光市が誕生しています。工廠ができる前は瀬戸内のどこにでもある、半農半漁のまちだったようです。

吉村　どうして、工廠が出来たのでしょうか。

佐伯　海軍上層部で、拡張不能だった呉海軍工廠の代わりに、新しい工廠を造る計画が昭和12年末ごろから進められていたようです。事実この時期に、光市上空を頻繁に軍の飛行機が飛んでいたという目撃談があります。おそらく航空写真などの事前調査のためだったのでしょう。

　その後、建設条件を満たした光市に、昭和13年5月に突然工廠進出が決まったのです。

吉村　地元はそれまで何も知らされなかったのでしょうか。

佐伯　秘密裏に進められたようです。建設予定地で暮らしていた人たちは突然、集められて、協力を要請され、当時の事ですから泣く泣く従ったようです。

　工事は海岸の干潟を埋め立てるなど昼夜兼行で行われました。人手不足のため広島刑務所の受刑者が動員されたそうです。

　建設資材は列車で運ばれたようですが、島田川に当時架かっていた橋は木橋のため、重い資材が運べず、距離の近い現在の光駅では島田川を渡ることが出来ず、島田駅からの陸上輸送が使われたようです。

　なお、現在国道188号に架かる千歳大橋は、昭和16年6月に完成しています。

　現在の県道は新日本製鐵の正門に、一直線に続いていますが、昭和14年に作成された道路図面（右下工事図）で旧県道が向きを変えられた様子が分かります。資材輸送や配水管埋設工事が容易になるようにしたのかもしれませんね。

　当時の住民の話によると「島田駅に降ろされた資材が台車に乗せられ、きしむ音を立てて海の方に引かれていった」という話を聞いたことがあります。

　いずれにしろ96万坪（東京ドーム約244個分）という建設用地の造成、および工場建設、そこで働く3万人を超える人のための住宅建設、工業用水や住宅用水道のための水道施設建設、現在の国道188号、当時としては規格外の幅員22mの道路建設などの近代都市としてのインフラ整備が海軍予算、つまり、国の費用で行われたわけです。

吉村　今、全国の自治体が企業誘致に取り組んでいますが、今流に言えば、70年近く前に、3万人余りが働く工場誘致が行われた訳ですね。

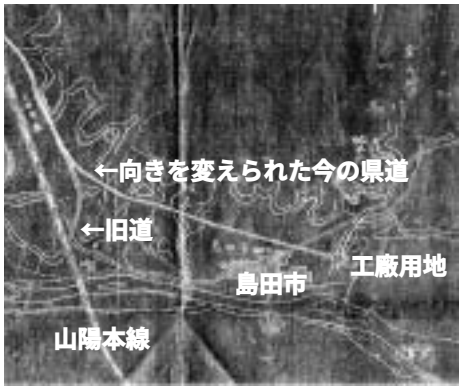
佐伯　そうですね。わずか2年半で完成させているのには驚きます。まさに、国策とでも言いますか日本の総力が結集されたのでしょう。また、工廠完成後の昭和18年11月には、岩田、三輪、塩田、束荷の4村が合併して大和村が誕生しています。大和の未舗装の道路を野菜などを積んだトラックが走り、工廠に配達していたようです。

吉村　それだけの労力をかけて建設した工廠が、たった4年余りで破壊されたのですね。

佐伯　終戦前日（8月14日）の多くの犠牲が悔やまれます。しかし、戦後の光市の発展に、残ったインフラの果たした役割は大きいですね。

光地方史研究会
佐伯（さえき）　亮二（りょうじ）さん

領家から新日本製鐵へ向かう県道



呉海軍工廠で作られた道路工事図

発展の原動力二大企業　工廠跡地に進出

戦後いち早く光市へ

武田薬品工業総務人事センターの三戸雅就さんにお話を聞きました。

吉村　武田薬品は戦後いち早く、昭和21年5月に光市進出を決定されていますが、どのような経緯で光市進出されたのでしょうか。

三戸　戦前から、大阪の本社工場が手狭なため適地を求めていたのです。いろいろな場所が候補に上がってはいたのですが、会社の条件に合わず宙に浮いていたそうです。終戦から間もなく、工廠病院の関係者からの光海軍工廠の転用の情報がたまたま会社の知るところとなり、当時の磯部貞次市長が本社東京支店の小西常務取締役を訪ねて誘致されたのが発端です。光市の住宅事情、労務状況、食糧事情をはじめ水道、電力、地盤、地下水を含む工業用水などを検討し、適地との結論を出したのです。

吉村　戦後すぐですから、工場建設などは大変だったのでしょうね。

三戸　昭和20年11月に関係官庁に申請しました。当時のGHQ（連合国最高指令官総司令部）から国内の衛生事情の悪さを解消するためのワクチン生産を優先するという条件付きで昭和21年5月に転用が許可されました。

　資材や動力の優先割り当てはあったものの、全国的な物資不足の中、ワクチン生産に不可欠な、卵や肉などの入手には苦労したようです。しかし、先輩たちの努力により、昭和22年に発疹チフスワクチンを初出荷し、その後も各種ワクチンや医薬品の生産にまい進してきました。

吉村　兵器工場の後に出来たのが、人の命を守るための製薬工場というのに何かしら、宿命めいたものを感じますね。

三戸　敷地内にはいまだに防空壕などの遺物が残っていますが、建物のレイアウトなどは工廠当時のものをそのまま生かして利用しています。

　優れた医薬品の創出を通じて、人々の健康と医療の未来に貢献したいと考えています。

構内に残る防空壕跡

初めての工場進出先が光市、

工廠跡地の三分の二を占める新日本製鐵（現新日鐵住金ステンレス）庶務室の徳原信之さんにお話を聞きました。

吉村　光製鐵所は八幡製鐵㈱として昭和30年初めて八幡以外の場所への工場進出でしたが、光市からの誘致活動はいかがだったのでしょう。

徳原　昭和26年に当時の松岡三雄市長や市議会関係者から誘致の要請があったようです。昭和25年、26年当時に八幡製鐵所と川崎製鉄所が県に進出話を持ってきたようですが、川崎製鉄が千葉に進出したので、八幡製鐵が光に進出することが決まりました。後日、川崎製鉄の方が来られて、千葉は砂地で地盤が弱くて苦労したという話をされていました。

吉村　武田薬品は薬、新日鐵は鉄と、いずれも戦後の日本の発展に必要な製品をつくる工場が、工廠跡に進出することになったわけですね。

徳原　当時進出にあたっては、「古い設備を移設したり、手馴れた技術に頼るのではなく、革新的な設備と技術を誇れるような工場を目指す」というコンセプトが上層部より掲げられ、光製鐵所は次々と新しい技術や製品を生み出してきています。

吉村　工廠跡地に進出したことのメリットは何かありましたか。

徳原　やはり広い敷地と、安定した地盤、さらには豊富な工業用水など、多くのメリットがあります。

　また、敷地が一辺３００ｍをベースに設計されており、増設などの時に役立っています。正門からの主幹道路の地下には、巨大な共同溝が１km以上にわたって２本埋設してあり、現在でも１つは工業用水と通信網に、もう１つは動力用にと現役で活躍してくれています。

　おかげで地上部分に電柱などが必要無く、道路なども広く使えています。現在、光地区には３社（新日鐵住金ステンレス㈱、新日本製鐵㈱、新日鉄マテリアルズ㈱）が同居していますが、それぞれが補完しつつ鉄を通じて地域に貢献しています。

現在も使われる巨大な共同溝

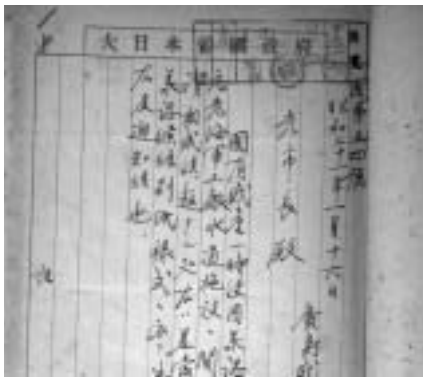
市民に残された工廠の遺産

今も使われる工廠の施設

戦後、市民生活の基本的な基盤整備として、上水道の整備は急務でした。光海軍工廠の遺産を活用した、上水道整備に関して光市水道局の田中和義工務課長にお話をお聞きしました。

吉村　光海軍工廠の工業用水施設の整備については、今回の取材の中でたびたび耳にしていますが、当時の光市の水道整備の状況と、上水道整備に海軍工廠がどう関わったのか教えてください。

田中　工廠開設当時、住民の生活用水は全て井戸でした。工廠開設後、室積大町や三井今桝、浅江和田町などに工員住宅が、市内各地に、寄宿舎が建設され、それらには配水管が敷設され、昭和15年から軍用水道により、給水がはじまりました。終戦後、施設は、軍から国の財産となっていましたが、光市ではこれらの水道施設を利用することとし、国からの許可と認可も得て昭和23年から光市の上水道事業が始まりました。



工廠水道の一時使用に関する書類

吉村　工廠の水道施設を利用することで光市の水道が早くから整備されたのですね。そのことで、どのような利点があったのでしょう。

田中　水道設備は水源からの取水設備、飲み水にする浄水設備、家庭まで水を送る配水設備が必要です。

　このうち、未整備の浄水設備以外は、ほとんどの施設がそのまま使用できました。そのため、費用の面からも大変な節約になりました。今のお金に換算した場合、何百億円にもなると思います。配水管には今だにその当時のものを使用しているところもあります。

　また、工廠が採用していた、島田川の伏流水からの取水という方法は、取水した水の水質が非常に良いため、薬品投入なども少なくてすみ、おいしい水が提供できます。

　光市の水道料金は県内でも安価ですが、おいしくて安い水を戦後ずっと市民に供給できたのも、施設整備への初期投資が工廠施設の再利用という事情から非常に安上がりだったからにほかなりません。

吉村　いわば市民全員が戦後ずっと、直接的に恩恵を受けていることになるのですね。

田中　そのとおりです。加えて工廠進出の決め手になったであろうと推測される、島田川の豊富な水量と、工廠内部への配水施設は、後の二大企業の進出にも大きな影響を与えたと思いますよ。

　道路や水道という都市計画の基礎が工廠の建設とともに整備されていたというのは戦後の光市のまちづくりの礎になったと思います。

軍用水道時の止水栓部品
（海軍水道の文字が読める）

取材を終えて

光市の、都市としての骨格づくりは、突然の光海軍工廠の開設に始まり、戦争中の昭和18年4月に「光市」が誕生しました。

　光市を語るには、光海軍工廠を抜きにしては考えられません。

　建設から破壊までの悲痛な体験から、戦後、日本を代表する二大企業を迎え、近代都市として生まれ変わり、さらには工廠の遺産である水道施設などを新生光市の財産として活用し、現在の平和で住みよい光市へと創りあげてきた先人たちがいたのです。

　今回の取材は、都市としての光市の歴史をもう一度学び直す良い機会であったと思います。

　両企業が、さまざまな経緯の中で光市に進出し、戦後大いなる貢献をしてきたこと。さらには、工廠の遺産が戦後の光市民にどのような大きな意味を持っていたかなど、忘れてはならない歴史を再確認できました。また、両企業の製品には世界一やオンリーワンのものがあり、これこそが光市の特産品として誇れる物だと思います。

　光海軍工廠が戦後に果たした役割と今後のまちの発展を考えつつ、レポートを終えます。